

縄文土器の底部圧痕から見た編組技術

國井 秀紀・柿沼 梨沙

1 はじめに

縄文土器の底部圧痕には、土器製作時の敷物の痕跡が残る場合がある。本稿では、この底部圧痕のうち、編組品の痕跡と見られるものを取り扱う。この編組品には、ござ目編み・網代編み・もじり編みなどの各種があるが、本稿ではその圧痕の総称として、便宜的に「編組圧痕」と称することとする。このような編組技法は、縄文時代から基本的な編み方に変化がなく、現代まで受け継がれている。その中で、縄文時代の編組技術を理解するには、遺跡から出土したカゴはもちろんであるが、時期がわかりやすく、出土量が多い編組圧痕の調査が有効である。

福島県文化財センター白河館では、現代の編組技術保持者の高齢化やその後継者不足によって失われる「技術」の保存の在り方を平成24年度から検討し、編組技術の研究に取り組みながら、体験活動への応用を図ってきた（註1）。その成果については、平成28年度の歴史再発見事業『手仕事ふくしま』資料展「編み組技術のルーツと現在」、平成29年度の企画展「編む・組む・削る—植物利用の技術史—」で公表している。

本稿では、これらの展示に伴う縄文土器底部の編組圧痕の調査において、縄文時代の編組技術がどのように理解できるか、現代の編組技術及び再現実験等の成果について検討する。

2 縄文土器底部の編組圧痕

(1) 縄文土器底部の編組圧痕の調査

上述した編組関連展示の実施に伴い、収蔵資料^(註2)の中から縄文土器底部の編組圧痕628点を分析対象として選出した。さらに、平成29年度の展示では、これらの資料を時期ごとに並べ、その特徴を紹介した（写真1）。

今回の調査では、時期による編組圧痕の変化や特殊な編組技法等を確認した。また、現代の

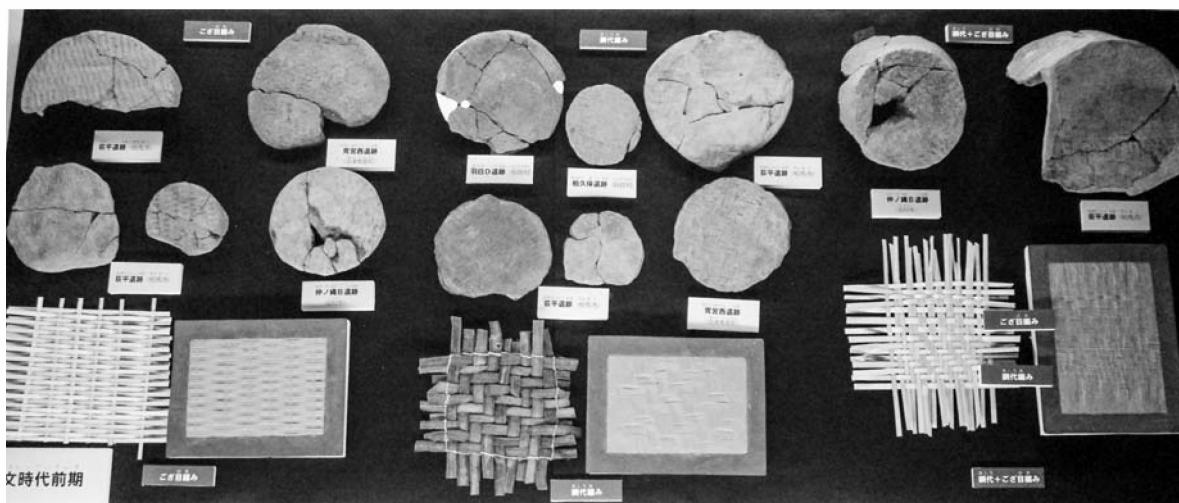


写真1 企画展「編む・組む・削る－植物利用の技術史－」編組圧痕の展示（縄文前期）

編組技術を参考とした再現実験や、製作者の視点による素材痕の観察等を実施した。さらに、編組圧痕のレプリカ作成等により、縄文時代の編組技術の情報を読み取ることに努めた。

(2) 現代の編組技術

網代痕をより深く理解するには、現代の編組技術を知る必要がある。ここでは、現代に残る編組技術の検討結果の一部を紹介する。

【材料の採取と加工】シノダケの場合は冬に採取する。また、カゴにより材料の生育年数が異なるため、ハカマ（皮）の状態から判断する（写真2-①）。次の加工では、タケを四つ割り（写真2-②）にし、「抱き剥ぎ」（写真2-③）などで幅や厚さを調整したヒゴがつくられ

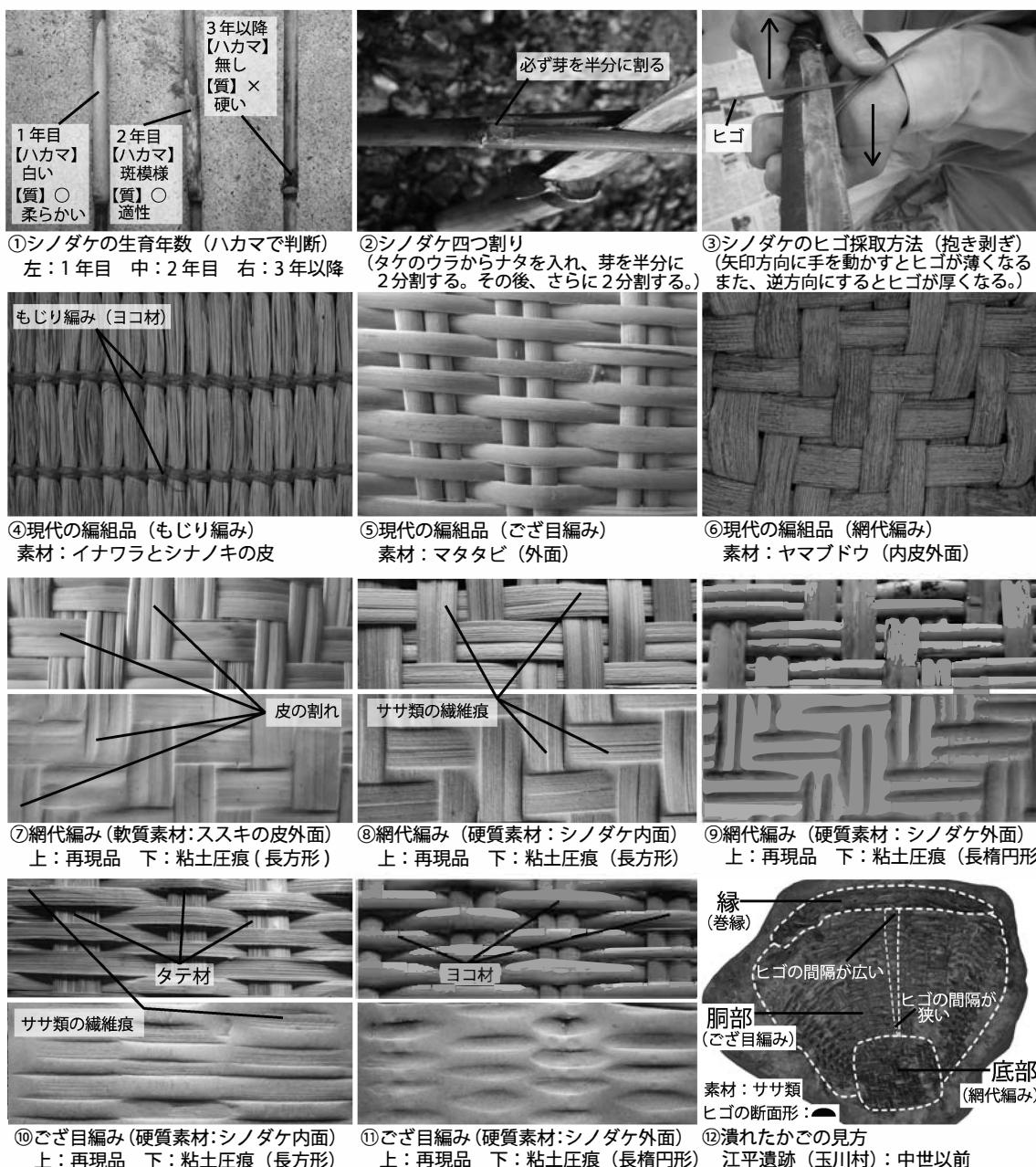


写真2 現在の編組技術

る。このような、材料づくりができなければ、受け継がれてきた編組技術は失われてしまう。

【素材による技法の違い】ワラなどの軟質素材には、芯材にヨコ材を巻きながら固定する「もじり編み」（写真2-④）や「巻き上げ編み」などが使用される。一方、竹や樹皮などの硬質素材には、同質の素材を交差させ、互いに固定する「ござ目編み」・「網代編み」（写真2-⑤・⑥）・六つ目編みなどが用いられる。

【素材痕の特徴】素材痕に見られる素材の厚さは、編組品のタテ・ヨコ材が交差した段差から計測できる。また、素材の硬さは、軟質素材であれば非常に浅い痕跡（写真2-⑦）、硬質素材であれば深い明瞭な痕跡（写真2-⑧～⑪）として観察できる。さらに、同じ製品でも、同⑧・⑨、同⑩・⑪のように、素材の外面と内面でその圧痕が大きく異なるものがある。素材の断面形が「■」形の場合、外面での圧痕は長楕円形を呈する（同⑨・⑪）が、その内面では長方形を呈する（同⑧・⑩）。もう一つの特徴としては、編組技法の違いによっても、圧痕の見え方が異なる。網代編みであれば、タテ・ヨコ材が均一に組み合うため、その痕跡は同じ深さになる（同⑦～⑨）。また、ござ目編みでは、編み材として動きが大きくなるヨコ材が深く、動きが少ないタテ材（芯材）では、浅くなる場合（同⑩）や確認できない場合がある（同⑪）。

【潰れたかごの見方】写真2-⑫は、玉川村江平遺跡^(註3)から潰れた状態で出土したカゴである。このようなカゴは、これまでの調査であれば、その大きさや編組技法等の観察にとどまることが多い。これに対し、実際にカゴを製作したことがある者では、素材の情報（節や芽、繊維痕、素材の断面形や内・外面の使用、素材の硬さ等）を確認し、底部・胴部・縁の編組技法やヒゴとヒゴの間隔の違いから形状を判断し、カゴを立体的に見ることが可能になる。

このように、現代の編組技術の中には、縄文時代の技術を読み解く手掛かりが内包されている。

（3）編組圧痕の調査から確認できた点

①時期による編組圧痕の変化

編組圧痕の時期ごとの特徴については、表1・2にまとめたとおりである。この表からは、最も古い編組圧痕は、表1-No.1に示す縄文前期前葉大木2a式期の磐梯町角間遺跡例である。

編組圧痕の素材幅は、縄文前期後葉～同中期中葉までが広く（写真3-①～⑥）、縄文後期前葉以降が狭くなる（写真3-⑦～⑨）傾向が読み取れる。また、縄文後期前葉以降は、ござ目編み主体となる傾向が見られる。この他、時期により編組圧痕の数量が異なる。特に、縄文中期末葉～後期初頭の時期については、底部が確認できる縄文土器が多いにも関わらず、編組圧痕が確認されないため、土器製作時に編組品等の痕跡を意図的に消した可能性も考えられる。

②特殊な編組技法等

特殊な編組技法を示す編組圧痕は、写真3-③・⑥、⑩～⑭に示した資料である。このうち、同③・⑥の縄文前期後葉と縄文中期前・中葉で確認した編組技法については、後述する。

縄文土器の底部圧痕から見た編組技術

表1 まほろん収蔵の編組圧痕

No.	時期	市町村名	遺跡名	資料数	編組技法の素材幅(㎜)							底径平均値 (㎜)	ヒゴ幅平均値 (㎜)	備考	
					網代	網代+ござ目	網代変種	ござ目	飛びござ目	木目ござ目	もじり				
1	縄文前期前葉	磐梯町	角間	1	1								78	6	(註4)
2	縄文前期後葉	南相馬市	小池田(1次)	11	5			6					81	6.4	(註5)
3	縄文前期後葉	南相馬市	石神	2	2								80	7.5	(註6)
4	縄文前期後葉	富岡町	本町西A	7	4			3					109	5.5	(註7)
5	縄文前期後葉	飯館村	羽白D	7	4			3					125	6.1	(註8)
6	縄文前期後葉	飯館村	宮内A	1	1								130	5.5	(註9)
7	縄文前期後葉	二本松	トロミ(1次)	2				2					121	5	(註10)
8	縄文前期後葉	田村市	仲ノ繩B	9	4	2		3					98	7.4	(註11)
9	縄文前期後葉	相馬市	荻平	11	6	1		4					144	7.5	(註12)
10	縄文前期後葉	会津美里町	冑宮西	4	3			1					170	6.6	(註13)
11	縄文中期前・中葉	南相馬市	宮前	11	2		6	3					134	5.4	(註14)
12	縄文中期前・中葉	福島市	八方塚A	6	1		2	3					135	4.6	(註15)
13	縄文中期前・中葉	福島市	八景腰巻	24			11	11			2				(註16)
14	縄文中期前・中葉	石川町	七郎内C	6			5	1						4.6	(註17)
15	縄文中期前・中葉	天栄村	二木松	1			1						142	4	(註18)
16	縄文中期前・中葉	天栄村	桑名邸	2				2					120	2.7	(註19)
17	縄文中期前・中葉	磐梯町	法正尻	40	4		12	22	1		1		138	3.9	(註20)
18	縄文後期前葉	南相馬市	赤柴遺跡	1				1					92	3	(註21)
19	縄文後期前葉	郡山市	荒小路	6	2			4					113	2.6	(註22)
20	縄文後期前葉	須賀川市	王子前	12	1			11					77	2.5	(註23)
21	縄文後期前葉	大熊町	道平	1				1					60	1.2	(註24)
22	縄文後期中葉	いわき市	タタラ山	3				3					73	1.9	(註25)
23	縄文後期中葉	福島市	弓手原(1次)	18	2			16					82	2.4	(註26)
24	縄文後期中葉	三春町	柴原A	1				1					128	4	(註27)
25	縄文後期中葉	郡山市	荒小路	4				4					121	2	
26	縄文後期中葉	郡山市	北向	1				1					100	1	(註28)
27	縄文後期中葉	矢吹町	赤沢A	1					1				79	2.5	(註29)
28	縄文後期中葉	猪苗代町	登戸	1				1					73	1.5	(註30)
29	縄文後期中葉	磐梯町	角間	27	6			20		1			89	2.1	
30	縄文後期中葉	会津美里町	道上	4				4						2.5	(註31)
31	縄文後期末葉	浪江町	田子平	1				1					112	1	(註32)
32	縄文後期末葉	飯館村	日向南(3次)	1				1					100	1	(註33)
33	縄文晚期	浪江町	田子平	1				1					98	2	
34	縄文晚期	飯館村	岩下B	1				1						3.5	(註34)
35	縄文晚期	飯館村	岩下C	1				1					84	2	(註35)
36	縄文晚期	飯館村	宮内B	5				5					97	1.8	(註36)
37	縄文晚期	須賀川市	浜井場B	1				1						3	(註37)
38	縄文晚期	猪苗代町	登戸	1				1					63	1	
39	縄文晚期	会津美里町	下谷ヶ地平B	2				2					68	1.5	(註38)
40	縄文晚期	西会津町	塙喰岩陰	3				3					81	2.5	(註39)
41	弥生時代	相馬市	柴迫	2	1			1					123	5.8	(註40)
42	弥生時代	郡山市	唐松A	1				1					95	3.5	(註41)
43	弥生時代	会津坂下町	能登	3				3					84	2.1	(註42)
44	弥生時代	飯館村	岩下A	1				1					68	3	(註43)

※土器焼成に伴う収縮率: 約10% (平成26年度 実技講座「縄文土器づくり上級編」土器計測結果より)

このため、土器製作時に底部に敷かれた編組品の素材幅は、表に示した計測値より約10%大きくなる。

表2 まほろん収蔵の編組圧痕 (時期別集計)

No.	時期	資料数	編組技法の割合(%)							底径平均値 (㎜)	ヒゴ幅平均値 (㎜)	
			網代	網代+ござ目	網代変種	ござ目	飛びござ目	木目ござ目	もじり			
1	縄文前期前葉	1	100							78	6	
2	縄文前期後葉	54	39	5		56				120	5.2	
3	縄文中期前・中葉	90	8		41	47	1		1	133	4.2	
4	縄文後期前葉	20	15			85					85	2.3
5	縄文後期中葉	60	13			83	2	2			93	2.2
6	縄文後期末葉	2				100					106	1
7	縄文晚期	15				100					88	2
8	弥生時代	7	14			86					92	3.6

写真3-⑩・⑪は、タテ材にヨコ材を巻いて固定したもじり編みが施されるものである。現在のスダレ等に使われる技法で、確認数はこの2点のみである。日本で最も古いもじり編みは、縄文草創期の鹿児島県三角山I遺跡の出土土器にその圧痕が確認されている（註44）。同⑩は、もじり編みを多段に施し、大きさやもじり編みの間隔から現在の簀子に近いものと判断できる。同⑪は、網代編みの変種（註45）の端部が緩まないように固定したものと考えられる。

写真3-⑫は、菱形の模様を呈する柾網代編みである（註46）。最古の例としては、縄文早期後葉の佐賀県東名遺跡出土のAM1015編組品等が挙げられる（註47）。また、写真3-⑬・⑭は、現在では用いられていない編み方である。同⑬は、横長の菱形の痕跡が認められるが、タテ・ヨコ材がなく不安定になると考えられるため、斜め方向に歪んだ製品の可能性がある。同⑭は、収蔵資料ではないが、極めて複雑な編組技法によると思われるため、参考資料として掲載した。似た技法としては「差し六つ目編み」（註48）が挙げられる。

この他、写真3-⑮は、編み方が本来一目越えのところを、二目越えさせた編み違いが確認できる資料である。このような編み違いは、縄文時代晩期末葉の三島町荒屋敷遺跡（註49）から出土したカゴからも確認できる。

3 編組技術を知る手掛かり

（1）再現実験から推定できる技術

再現実験を実施すると、縄文時代における編組品の素材の特徴や、その質感などまで具体的にイメージすることができる。製作者の視点は、再現実験を繰り返し実施してはじめて理解できるものである。

①縄文前期後葉の網代編み+ござ目編み

仲ノ縄B遺跡からは、一つの資料の中に網代編みとござ目編みを行う資料（写真3-③、写真4-①）が出土している。この技法は、縄文早期後葉の佐賀県東名遺跡から出土したAM1015・AM2140-2編組品等から確認され、底部から胴部下半部まで網代編みを行い、その上部をござ目編みに切り替えるものである。現代の笊の場合では、網代編みの底部からござ目編みの胴部に立ち上げるため、編み替える立ち上げ部分に柔らかい素材を使用する。しかし、仲ノ縄B遺跡例は、現代の笊のように、切り替え部分に別素材がないことから、東名遺跡の編組品に近いものと判断できる。

この技法の資料は、今回の調査で3点（註6文献第46図23、註11文献第41図5・6）を確認した。いずれも縄文前期後葉大木4式期のもので、現在では見られない編組技法である。このため、この技法は、現段階では日本列島の縄文早期後葉～同前期後葉に限定されると考えられる。

この技法については、写真4-①の再現実験を行った（写真4-③）。この結果、写真4-①は、編組技法の切り替え部分を境に編み方が明確に異なり、タテ材が連続することが確認できた。しかし、写真4-②は、編み方が切り替わる部分の境が不規則で、タテ材のつながりが確認できない。このため、同②については、網代編みからござ目編みに切り替えたものではな

縄文土器の底部圧痕から見た編組技術

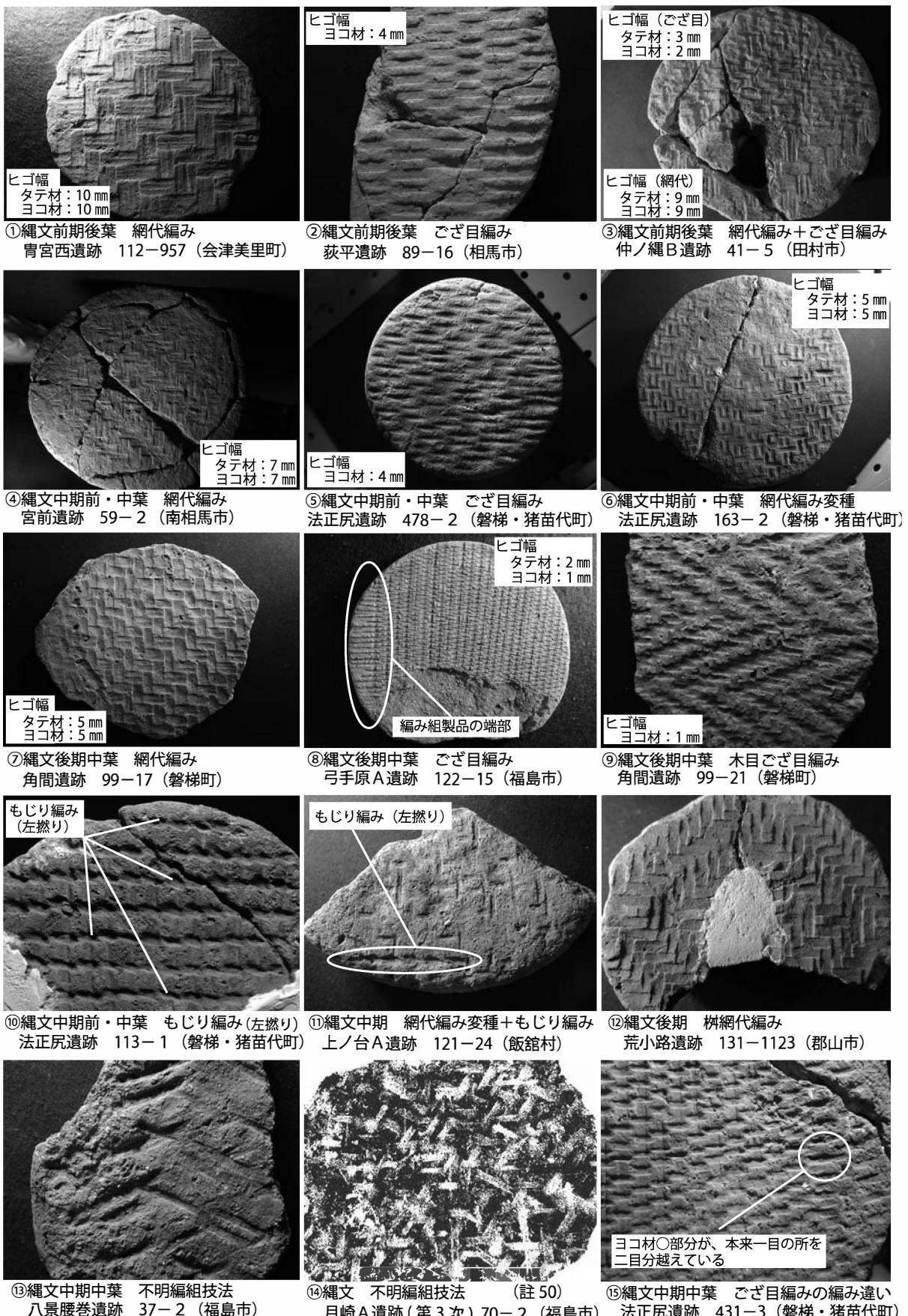


写真3 土器底部の編組圧痕

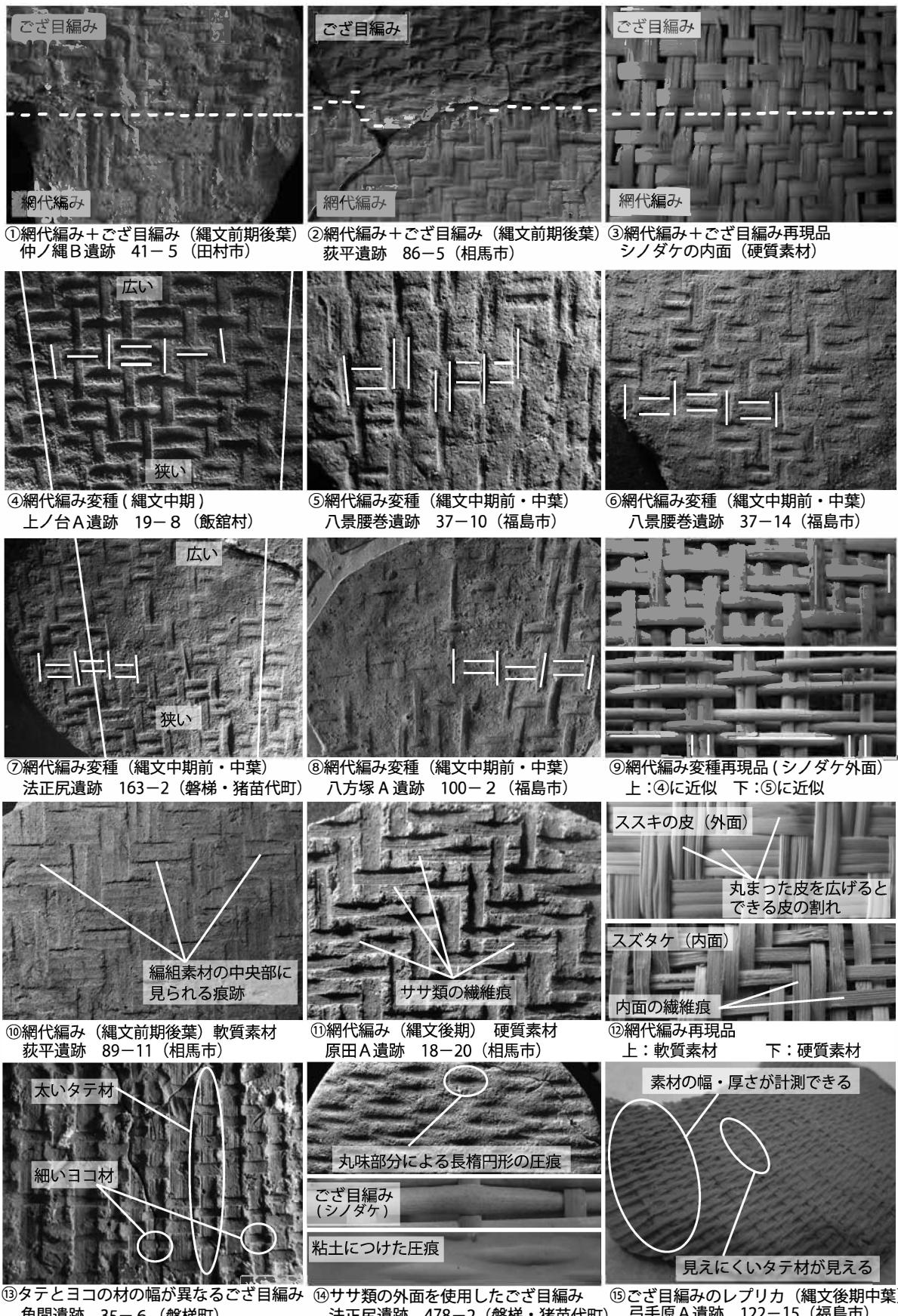


写真4 編組圧痕から読み取れる情報

く、網代編みとござ目編みの異なる製品を高度な技で合わせたものと考えられる。

②縄文中期前・中葉の網代編みの変種

この網代編みの変種は、現在では見られない編み方で、縄文中期前・中葉に限定される技法である。今回の調査では、最も多く出土した磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡の資料から、その時期が大木 8a～8b 式期までの範囲で確認した。この他、収蔵資料ではないが、縄文時代中期の大木 7a～8b 式期を中心とした郡山市妙音寺遺跡^(註50)からは、網代編みの変種の編組圧痕が 30 点以上も確認されている。

この技法については、同質素材の使用とタテ・ヨコ材が編み材として互いに組んで固定することから網代編みの一種であると判断できる。今回確認した網代編みの変種には、写真 4-④～⑧に見られる「|—|=|—|」・「|=|=|=」等の基本パターンが見られる。また、編み目幅による違いに着目すると、目の飛び方が小さいもの（写真 4-④・⑥・⑦）はタテ・ヨコ材の圧痕の深さが同じであるが、目の飛び方が大きいもの（写真 4-⑤・⑧）は圧痕の深さが最も深くなることが確認できる。これらの技法については、写真 4-⑨に示した再現実験を行った。同⑨の再現品からは、実物を見ることで、網代編みの一種でありながら、ござ目編み及び飛びござ目編みに非常に近いことが判断できる。以上のことから、網代編みの変種は基本的なござ目編みや網代編みよりも複雑で、高度な技術であることが確認できる。

（2）編組圧痕に見られる素材痕の情報

編組圧痕に見られる素材痕については、写真 2-⑦～⑪で先述したとおりである。このような基本的な点を覚えることで、写真 4-⑩～⑭に見られる素材痕の情報を読み取ることができる。

網代編みに使用される素材には、写真 4-⑩のような薄い軟質素材と、⑪のような厚手の硬質素材の 2 種類がある。その違いは、網代痕に見られる痕跡の深さやその形状からおおよそ見分けることができる。同⑩に見られる素材痕の中央に見られる明瞭な筋状の痕跡は、2 本 1 単位のヒゴが素材であると判断できる。しかし、これに似た例として、写真 4-⑫上や写真 2-⑦の再現品に見られる不規則な筋状の窪みは、写真 2-⑦下のように素材の割れと判断できる。

また、写真 4-⑬は、タテ材が太く、ヨコ材が細い幅の異なる資料である。このような、ござ目編みのタテ・ヨコ材の判断は、タテ材（芯材）に動きがなく、ヨコ材（編み材）に動きがあるため、それぞれの動きから確認できる。写真 4-⑭は、長楕円形の圧痕が残る資料で、写真 2-⑪でも先述したとおり、素材の断面形が「■」形となる外面を使用した痕跡である。

（3）編組圧痕のレプリカ

編組圧痕のレプリカとは、シリコンゴムでその形を写し取り、正確で立体的に表したものである。当館では、植物考古学者の佐々木由香氏の指導を受けて作成した。写真 4-⑮は、素材幅が非常に細い縄文後期中葉のござ目編みのレプリカである。このレプリカからは、素材幅や

厚さが計測しやすく、また見えにくいヒゴまでも容易に確認できる。このように、簡単に多くの情報を得られる編組圧痕のレプリカは、その再現を可能にすると同時に、今後の縄文時代の編組技術を研究する上で最も重要と考えられる。

4 おわりに

今回の編組圧痕の調査では、①編み方の違いや素材幅の計測などの基本的観察、②実際に同様の製品を製作する再現実験、③痕跡を写し取り現物に近い状態に再現するレプリカ作成により、それぞれの方法から編組圧痕の情報を検討した。現代に残る編組技術を参考にした再現実験からは、編組圧痕に見られる様々な縄文時代の編組技術をより深く読み取ることができた。

本稿では、編組圧痕からの情報の読み取り方について、その一部を紹介したにすぎない。このため、編組圧痕を検討するにあたっては、現代の編組技術を理解することにより、編組圧痕の違いや特徴を見分け、それらの情報を引き出すことが重要である。

縄文時代から現代まで受け継がれてきた技術は、技術保持者の高齢化や後継者不足により、今急速に失われようとしている。一度失われた技術は、元には戻らない。また、その価値に気付かなければ失われてしまう。そのため、失われようとする民俗技術の映像記録及び情報の収集を早急に行い、これらを再現可能な状態で記録・保存することが重要である。また、当館では、編組技術の再現実験から得られた成果を体験学習事業に反映させ、その技術の魅力と重要性を伝えていきたいと考えている。

<註>

- (註 1) 國井秀紀 2015 「箕の製作から見えてきた民俗技術の記録作成の課題」『研究紀要 2015』福島県文化財センター白河館及び、材料の採取・加工から仕上げまで行う実技講座「竹かごをつくろう」等。
- (註 2) 福島県教育委員会が遺跡発掘調査を実施して出土した資料である。
- (註 3) 福島県教育委員会他 2002 「江平遺跡」『あぶくま南道路 遺跡調査報告 12』
- (註 4) 福島県教育委員会他 1990 「角間遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 8』
- (註 5) 福島県教育委員会他 2008 「小池田遺跡（第 1・2 次）」『常磐自動車道遺跡調査報告 51』
- (註 6) 福島県教育委員会他 2008 「石神遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 52』
- (註 7) 福島県教育委員会他 2002 「本町西 A 遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 32』
- (註 8) 福島県教育委員会他 1987 「羽白 D 遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 X I』
- (註 9) 福島県教育委員会他 1990 「宮内 A 遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 X V』
- (註 10) 福島県教育委員会他 2012 「トロミ（第 1 次）」『阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告 I』
- (註 11) 福島県教育委員会他 1993 「仲ノ繩 B 遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 19』
- (註 12) 福島県教育委員会他 2009 「荻平遺跡（第 2 次）」『阿武隈東道路遺跡発掘調査報告 2』
- (註 13) 福島県教育委員会他 1990 「冨宮西遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告 VII』
- (註 14) 福島県教育委員会他 2005 「宮前遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 40』
- (註 15) 福島県教育委員会他 1999 「八方塚 A 遺跡（第 1 次）」『猪上川ダム遺跡調査報告 VII』
- (註 16) 福島県教育委員会他 1975 「八景腰巻遺跡（第 1・2・4 次）」『東北自動車道遺跡調査報告』
- (註 17) 福島県教育委員会他 1982 「七郎内 C 遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告 X』
- (註 18) 福島県教育委員会他 1987 「二木松遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告 1』
- (註 19) 福島県教育委員会他 1989 「桑名邸遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告 4』
- (註 20) 福島県教育委員会他 1991 「法正尻遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 11』
- (註 21) 福島県教育委員会他 2011 「赤柴遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 63』

- (註 22) 福島県教育委員会他 1985 「荒小路遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告 19』
(註 23) 福島県教育委員会他 1989 「王子前遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告 26』
(註 24) 福島県教育委員会他 2003 「道平遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 37』
(註 25) 福島県教育委員会他 1996 「タタラ山遺跡（第 2 次）」『常磐自動車道遺跡調査報告 9』
(註 26) 福島県教育委員会他 1996 「弓手原 A 遺跡（第 1 次）」『猪上川ダム遺跡調査報告 I』
(註 27) 福島県教育委員会他 1989 「柴原 A 遺跡（第 1 次）」『三春ダム遺跡調査報告 2』
(註 28) 福島県教育委員会他 1990 「北向遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 7』
(註 29) 福島県教育委員会他 2001 「赤沢 A 遺跡」『あぶくま南道路遺跡調査報告 10』
(註 30) 福島県教育委員会他 1988 「登戸遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 3』
(註 31) 福島県教育委員会他 1985 「道上遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告 III』
(註 32) 福島県教育委員会他 2010 「田子平遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 58』
(註 33) 福島県教育委員会他 1987 「日向南遺跡（第 3 次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 IX』
(註 34) 福島県教育委員会他 1985 「岩下 B 遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 VII』
(註 35) 福島県教育委員会他 1985 「岩下 C 遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 VII』
(註 36) 福島県教育委員会他 1987 「宮内 B 遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 X I』
(註 37) 福島県教育委員会他 1988 「浜井場 B 遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告 25』
(註 38) 福島県教育委員会他 1986 「下谷ヶ地平 B・C 遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告 IV』
(註 39) 福島県教育委員会他 1994 「塩食岩陰遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 25』
(註 40) 福島県教育委員会他 2002 「柴迫遺跡」『一般国道 6 号相馬バイパス遺跡発掘調査報告 IV』
(註 41) 福島県教育委員会他 1982 「唐松 A 遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告 VIII』
(註 42) 福島県教育委員会他 1990 「能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 10』
(註 43) 福島県教育委員会他 1985 「岩下 A 遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告 VII』
(註 44) 鹿児島県埋蔵文化財センター他 2006 『三角山遺跡群（3）（三角山 I 遺跡）第 1 分冊 縄文時代草創期編』
(註 45) 「網代編みの変種」の名称を付けるにあたっては、バスケタリー作家の本間一恵氏による貴重なご意見を参考にさせていただいた。また、その資料の選出については、筆者（國井）自身が行った。
(註 46) 大分県別府産業工芸試験所 1991 「樹網代編み」『竹編組技術資料 基礎技術編』44・45 頁。この編み方は、網代編みの一種で、タテ・ヨコ材を 5・3・1 で越え、潜りを繰り返すことでつくられる。
(註 47) 佐賀市教育委員会他 2010 『東名遺跡群 II』第 5 分冊
(註 48) 日本工芸技術協会 1978 『竹編組 デザイン資料』
(註 49) 三島町教育委員会他 1990 『荒屋敷遺跡 II』
(註 50) 福島市教育委員会他 1991 「月崎 A 遺跡（第 3・4 次調査）」『飯坂南部土地区画整理事業関連遺跡調査報告 I』
(註 51) 郡山市教育委員会他 1996 「妙音寺遺跡（第 1 次調査）」『郡山東部 16』
 郡山市教育委員会他 1997 「妙音寺遺跡（第 2 次調査）」『郡山東部 19』

【写真出典】

・写真 1～4 …筆者撮影